

山吹中学校二組の輪

龍口 宏

東京から疎開をし山吹国民学校の一年に転校したのは、戦争真っ最中の昭和十九年の秋頃であった。伊那谷を天竜川が帯を引くように流れ飯田線が寄りそって走る光景は、絶景で戦争とは無縁のようなのだかさだった。

小学校二年の時に終戦。私達の学年は子沢山の時代で一学年の員数が百十人前後でかなり大勢だ。二つの組があり私の組は小学校は「いろは」のろ組、中学校は二組で校舎は同じ場所にあった（ろ組の六年生のときは男子二五名女子二八名。山吹村と市田村が合併し高森町になる「高森北小学校百年史」より）。

我が学年の不思議なのは小学一年から中学三年までの九年間、クラス替えが一度もなかった。上の学年も下の学年もクラス替えをしたが、我が学年だけは組替えなしだった。強いて問題にする必要はなかったが理由は「生徒が多数人数なので」と聞いた。

二組の憧れの女性マドンナは誰であつたらうか、記憶では松村清子のような気がするが、美に対する好みは人によって違っており中平春美、橋都逸、森川スミ子、龍口美保子、清水すすみ、中平悦子、全員がマドンナである。

二組の男子二五人の中で親の希望通り稲作中心の家督を継ぐ長男は六人。家督に



たかのくち ひろし

一九三七年、東京生まれ 七六歳。聖橋高校卒業、明治大学文学部中退。高校、大学ともに夜間部。父が若死にのため一五歳から働き多種の職業と人生経験したのが私の原点。第六回エッセイ賞、奨励賞受賞。

関係ない二、三男は東京に職を求めた。

社長が最高の地位と思わないが二組で、松元正治、宮島隆市、矢澤登が後々、経営者になった。三人は社長の資質が備わっていたのか小学生の頃から、他の子供とは違う面を持っていた気がする。

戦後の工業国日本の発展は凄まじかったが、上京した一五歳の私に直接には関係なく現実には、初めての工場の労働、初めての定時制高校、初めての大家との間借り生活。全てが初めての経験で戸惑い困惑した。

職場では故郷の伊那弁を喋らないようにしたが自然に出てしまう。遠慮しらずの会社の連中は真似をして冷やかし大笑い。恥ずかしいので無口になる。無口になるとストレスがたまる。気心を知る二組の誰かに会い伊那弁を喋りまくりたい心境になった。

我が二組の寺沢峻二が新宿の文化服装学院の近くの表具店に居るのが分かった。話す相手を求めて定時制高校をさぼり学院の付近で探し当てた。峻二は仕事が終わり私を見て驚き喜び店の側のだぶ川の所で、久し振りの伊那弁を大声で楽しんだ。中学校のとき彼は寡黙の方だったが、その時は多弁で日頃の愚痴をぶつけて来たから先に聞いた。

親方の仕事への厳しさは怒り次第では腕力を振う。疲れて戻る住居を兼ねた店では親方の両親がおり、無理無体の嫌がらせをする赤鬼と青鬼のようだ！ 興奮しながら一気に訴え一息ついた。

代って私が不満を言い掛けたとき親方が現れて、峻二の腕を掴み強引に店に入ろうとした。彼は「来てくれて有り難う」手を合わせる格好をして店の中に消えた。

空しく帰ろうとしたとき親方が近寄って来て「ジャンパーなんか着ている奴は不良だ！ 二度と来ないでくれ」ジャンパーは大家の長男のお古で、お婆さんの好意で学生服だけでは寒かろうと譲ってもらったもの。

東京は全て先端を往く憧れの都の筈だ。親方のような程度の低さを思うと遣る瀬無いと同時に、悪条件の環境で彼が耐えられるか心配になった。——その後、寺沢峻二は表具師として腕を上げ、伊那谷の高森町で表具店を営みすこぶる評判が良い。

一週間後に服装店に勤める我が二組の大野光男を訪ねた。山手線の目黒駅の近くの店先で壮健なのを確かめ合い立ち話で別れた。店に店主がおり勤務中の彼に迷惑

を掛けると思ったからである。大野は事情があつて幼児の頃より親と別々に暮らしたらしい。喜怒哀楽を面に出さず何事もマイペースが好きだ。服装店は半年で辞めて、その後六十年間、同級生の誰とも会わずに消息が不明である。

一六歳の時に下島保、北城義人、池上智幸、西川太弥男と私の五人で上野動物園へ行った昼食に五人とも初めて「焼そば」なる異なるものを食べて、独特な乙な味に都会を感じた。——数十年後、北城は中堅企業の責任ある役職者になり、西川は札幌営業所長になった。池上は今も現役で高級な靴を手作業で、六十年間続け業界で名を馳せている。下島は中堅会社の重役にまで上り詰めた——。

三年が経過し故郷で高校を卒業した同級生が上京し、東京だけの山吹中学校二組のクラス会が催された。会の決め事はなく解散どき次回の幹事を決めてお開きになった。

一年後、今回の幹事は「高級料亭で豪華にやる」と言ったが、一向に案内状が来ない。酔った勢いで幹事を名乗り出たのを記憶してなかった。同じ理由で忘れた奴は三人いた。

二五歳になって私は、希望していた大手業界新聞社に入社した。職が安定すると心に余裕が出来てクラス会にも毎年、出席した。会を纏め継続させるために会長が必要の意見があり、陽気で騒々しい男矢沢登が全員賛成で会長になった。出席率が良い私が雑用係である万年幹事。後に子育てを終えた女性が出席するようになり、中塚敬子が女性代表の幹事を引き受けてくれた。

三人で歓迎される会にする打合せをし二つの禁止を決めた。それは自己満足の自慢話と人の悪口で、特に同級生の悪口を禁止にした。悪口を言う人は心が狭く次元が低いので、社会人になっても心身の成長がなく、交流の輪に入れずに悪口ばかりだ。

相手の短所は良く見るが長所を見ようとしない。我が子を如何ように教育したのか疑問に思う。会の輪を乱し仲間に嫌われないために、せめて新聞、雑誌、マンガでも良いから活字を読んで貰いたい。そして自分自身を見詰め直して欲しい。

幹事三人の一致点は九年間、一緒だった二組の輪を消滅させないことである。

会長になった矢沢登は会長としての威厳なるものはないが、彼が会に現れた途端に雰囲気明るくなるのが取り柄だ。体が大きく大声で話の内容は面白いが、何処までが本当か嘘か分かり難い。ふざけながら人を纏め偉ぶらないのが長所だ。彼が

一度だけ欠席したとき会は盛上らず火が消えたが如く、寂しく解散したが必要不可欠な男である。

故郷の山吹と東京のクラス会を合同で開く要望があり、実行するため矢沢と打合せをし私が出席した。新橋の玉木屋の佃煮を十五箱を用意し寺澤守男宅の二階で会合。

数日前に連絡したが女性十一名と男性四名が集めたのには、恐縮すると共に山吹会の結束に感心した。リーダー格の松村彰が「初回は山吹が行い次回は東京が主催して貰う。諏訪湖の予定で案内書は後日、郵送する」

事前に全員で話し合ったよう意見なく、彰の報告で決定し酒盛りに移った。私の立場は山吹会に出席し沈黙して居る役目であって、合同クラス会は成立した。

二次会は小平寛己、中沢重一、彰の四人で飯田市の一流クラブで心地好い気分で水割りを飲んだ。彰に奢って貰ったが彼は当時りんごの栽培に研究熱心で、独自の味に感銘し会社の取引先に送り好評であった。

死は予告なく訪れるが六十歳代で亡くなった同級生が東京で四人いる。

最初は秋廣光男、読書好きで会にも本を持参していた。司馬遼太郎ファンで真面目な人柄で謙虚な男。通夜と告別式の日時を全員に連絡したが、初めての同級生の死に驚き言葉もなく動揺の様子が電話から伝わってきた。

二人目は酒好きの餓鬼大将、松下文夫で死の直前まで酒を友にした。女子は乱暴者の先入観で恐れたが、ルールを守る餓鬼大将で男らしい男。闘争心が旺盛で飯田高校のラグビー部で活躍したのも性格の一端。会社では労働組合で主義主張を押し通したためマークされ、自ら枠外へ去った。彼を理解するには人間関係の表裏を知るべきだが、自己主張を曲げない意志の強い男だった。奥さんと息子の一人は日本舞踏の世界に入り、奥さんは家元である。

三人目は中塚敬子で過去の私事を多く語らずに、三十歳前後から女性一人だけ会の出席が長年続いた。育児から解放され同性が参加するようになり情愛ある笑顔になった。寛大な心の持主で仕事を楽しんで居る様子であり、会社の同僚もクラス会からも信頼された。女性代表のリーダーであり全体の幹事なので貢献度が大きかった。

四人目は坂牧富美、三人ともががんが原因だが、彼女も末期がんで手を施す状態でない程に進行していた。容貌が若々しく二次会では十歳以上も若く見られた。自

身にとってがんは当然ショックで、痩せ細り惨めな姿を家族以外とは面会を拒否した。再三、誠意を尽くした慈悲ある中平さだには逢い心を開くようになった。日に日に衰えてゆく我が身に無念の涙が止めどなく流れたであろう。

山吹会のリーダー松村彰の訃報が入り、現世に神仏が存在するならば……と残念に思う。彰は六歳のとき三三歳の父を亡くし責任ある立場になるのが早かった。実行力がある彼の死で合同クラス会は不可能になった。

七六歳になり大部分の同級生は十数年前に現役を引退し気楽な生活。私は体調を崩し幹事を降りて、宮下吉弘を矢沢に推薦した。彼の名幹事ぶりは三十余年間、勤務した複雑な人間関係を経験したのが行動に出ている。

暇な老人になった同級生達は一年に一回の旅行では満足できずに、年二回は新宿の歌舞伎町で一杯会を開いている。年三回は吉弘の方針であり即実行は二組の輪である。合同クラス会は彰の死で、代って行動する人が居ず消滅したも同然となった。だが東京会の旅行を合同にし自由に参加して貰う方法がある。吉弘も山吹会の交通の便を考慮し場所を選んでいようだ。

熱海での会には早速、小平高江が山吹会から初参加の第一号で出席してくれた。岐阜からは山吹の領法寺の娘だった木村澄子が、気品ある謙虚な態度で出席した。二組の人々が自身の意志で多数、集まるのを期待する。

最近の新宿のクラス会で会長の矢沢は、「俺は百歳まで生きて全員を看取ることにした。心細く惨めな有様ならうと、百歳まで生き抜く俺が最後の一人で居るので、悩みがあれば相談に乗るから安心してくれ！」

皆は百歳には野次り笑った。だが近頃の私は体調不良で、会の次の死は私では……との不安の中で、心に沁みる心強い言葉だった。

山吹中学校二組の輪は消えないでと願う。